

坪田讓治全集
7

坪田讓治全集
7

新潮社

坪田讓治全集 第七卷

印刷 昭和五十二年八月十五日

発行 昭和五十二年八月二十日

著者 坪田讓治つぼた じょうじ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

電話 東京 (〇三) 二六六―五一一 業務部
二六六―五四二 編集部

振替番号 東京四―八〇八

印刷・株式会社 金羊社 製本・大口製本株式会社

定価 二八〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

坪田讓治全集 第7卷 目次

正太の汽車

蛙

河童の話

善太と汽車

正太と蜂

ろばと三平

樹の下之宝

小川の葦

黒猫の家

バケツの中の鯨

合田忠是君

母ちゃん

村の子

熊

ダイヤと電話

シナ手品

三

三

四

元

四

元

五

四

五

五

四

六

六

七

七

五

鯉

八

激戦

六

スズメとカニ

七

芋

七

ハヤ

一〇

城山探険

一五

蜂の女王

二二

スキー

二五

異人屋敷

二九

日曜学校

三四

引っ越し

三〇

お馬

三五

どろぼう

四〇

魔法

四四

デンデン虫

五五

狐狩り

五九

時計退治

一六三

ペルーの話

一六六

真珠

一六八

蛇退治

一九二

ビワの実

一九五

岩

二〇一

猛獣狩

二〇七

白ねずみ

二二三

二ひきのカエル

二二八

狐

二三四

石屋さん

二三〇

新しいパンツをはいで

二三五

蜃気楼

二四〇

ジャンケン

二四四

おどる魚

二四七

狐と河童

二四九

探險紙芝居

少年鼓手

蟻のゆくえ

善太の手紙

秀吉を見ました

ペニー河のほとり

沙漠の中にて

早い時計

大入道

タコと小鳥

なまず釣り

太郎の望み

鼠の話

たんぼの大しょう

日の丸のはた

いたずら三平

二五四

二六四

二六八

二七一

二七三

二七六

二七九

二八〇

二九二

二九五

二九七

三〇三

三〇四

三〇九

三三〇

三三一

リスとカシのみ

三二

ナマズ

三四

ネズミのかくれんぼ

三五

ごほうび

三六

しりとりあそび

三七

水と火

三八

キツネのさいころ

三九

川はながれる

四〇

大きなもの

四一

小鳥の巣

四二

ウサギがり

四三

ネズミとすず

四四

もりのけもの

四五

いしとカエル

四六

ことりのやど

四七

ひとつのビスケット

四八

ふしぎないえ

三三

いたずら

三三

いちろうのぼうけん

三三

四月一日

三六

きしゃイヌ

三六

雪ふる池

三四

*

あとがき

坪田譲治 三七

編集後記

三二

(箱カット・中尾彰)

坪田讓治全集 第7卷（童話一）

魔

法
他

正太の汽車

「兄さん、あした学校へ行くの。」

と、夜ねる時、弟がたずねました。

「なぜ。」と、正太がきくと、

「だって、ずいぶん雪が降ってるんだもの。」

と、弟が言いました。すると、正太が、

「幾ら降ったっていいさ。僕なんか、汽車に乗って行くんだもの。」

と、言いました。

「だって、汽車なんかないじゃあないか。」と、弟がたずねますと、

「造ればあるよ。」と、正太が言いました。そこで、弟が

「造るの。」と、ききますと、正太は、

「そうさ。」と、言いました。

弟は、兄さんが、どんな汽車を造って、あした学校に乗

って行くのかしらと考えました。

あんまり一生懸命汽車のことを考えていたので、その夜は大きな汽車が玄關についている夢などを見ました。

が、あくる朝、玄關に出て、兄さんの学校へ行く処を見ていますと、兄さんの正太は、車掌さんのように片手を上にあげました。

「学校行きが出ます。小学校行き。お忘れものないよう
に。」

斯う言うと一緒に、「ピー——。」と、笛のような真似をしました。それから、「ポッポッポッ。」と、言って、口から湯気を出し、両脇にあげた手を汽車の機械のように動かしました。すると、直ぐに正太の汽車は門の方へ雪中を走り出しました。

「なんだ。汽車って、兄さんじゃあないか。」

弟がこういつている内に、もう正太の汽車は時々ピーピー笛を鳴らしながら、路の遠くに雪を蹴ちらして見えなくなっていました。

蛙

「ぼくが眠っていたら、ゆうべ、あのまどの所で、いつかねえさんに作ってもらった雪の兎がなっていたよ。」

朝おきると、正太が、こんなことをねえさんにいいました。

だって、冬の間、ひさしくあけなかった北のまどの外では、おぼんに乗せた雪の兎が北風に吹かれて、かたくこおって、吹きよせた雪の中に、ながい間寒そうにうずもれていたのであります。

「うそよ。」

ねえさんは、ほんとうにしませんでした。

しかし、正太は、どうしてもほんとうだといってきたません。

それで、二人は、まどの下へ行つて、耳をすまして聞いていました。すると、どうでしょう。

「ころころ、ころころ。」

という声が聞えて来ました。

「そら、ね、なっているでしょう。兎だよ。」

正太がまどの方をゆびさして、ねえさんのかおを見ました。

「ころころ、ころころ。」

ねえさんもおどろきました。

「ほんとうに兎かしらん。」

そこで、にいさんを呼んで来ました。にいさんは、そのなき声を聞くと、

「よし。」

と、いつて、すぐ、その雨戸をひらきました。

すると、まどの外には、もう、雪も消えていて、兎と思つたおぼんの上には、一びきの雨蛙が乗つておりました。

「なあんだ。」

みんなが大笑いをしました。雨蛙はその声におどろいて、兎のように、ぴよんと、へやの中にとびこみました。そして、ぴよん、ぴよんと、たたみの上をとんで歩きました。

「兎、兎。」

正太が喜んで、その後を追っかけました。

ひさしぶりでひらいたまどからは、春の風が吹きこみましました。そして、まどの外では、もういろいろの花がさきかけておりました。

河童の話

晩の御飯がすむと、後のお茶をのみながらおじいさんは嬉しそうに何だか考えこんでおりました。おじいさんは実は今日も話がしたかったのです。子供等もおじいさんのその顔を待っていました。だから御飯がすんでも、三人ともおじいさんのそばでおとなしく坐っていました。

「おじいさん、話は——」

おじいさんは、子供等にこう催促されるのが実は好きでした。話したくても、それまではいつもゆっくりお茶をのんでいました。

「早くしてちょうだい。」

次の弟の善太はせっかちでした。だから坐っていても落ちつかないで、ピョンピョン飛ぶような恰好をしております。

「じゃあ一つやるかな。」

おじいさんのはのんでしまったお茶の茶碗を下に置きまし

た。

「うん、長い長い。」

「長い——」

「そうナカイナカイの。」

末の弟の三平までが、廻らぬ舌で真似をして、よちよちおじいさんの膝の上に腰を下ろしに行きました。

「ところと——」

おじいさんが話し始めました。

「どんな話——」

「おじいさんの小さい時のこと。」

「じゃあ、河童の話でもするかな。」

「うん、河童の話——」

「じゃね、おじいさんの小さい頃、おじいさんのお家は田舎の、田舎の草の大へんに茂った村にありました。」

「どんなに茂ってた——」

「それはもう人の脊だつて埋まるくらい、それにお家の屋根の上にだつて、ぼうぼう草が茂っていた。」

「ふーん、深い草だねえ。」

子供等は代る代る感心したりたずねたりいたしました。

「ところで、その村は大きな野原の中にあつて野原には田圃が続いていた。田圃には川が流れていた。」

「どんな川、大きい、小さい——」